

令和7年度病害虫発生予察情報 発生予報第3号(5月)

令和7年5月28日

発表：福島県病害虫防除所

注意が必要な病害虫

果樹	■ リンゴ：リンゴ褐斑病 -② ■ モモ：モモハモグリガ -② ■ ナシ：ナシ黒星病 -② ■ 果樹共通：果樹カメムシ類 -②
野菜	■ 夏秋トマト：トマトキバガ (防除情報参考) -③ ■ 夏秋トマト：トマト黄化葉巻病 (TYLCV) -③ ■ あぶらな科作物：コナガ (防除情報参考) -③ ■ キク、リンドウ：ハダニ類 -② ■ キク：アザミウマ類 -② ■ 野菜花き共通：オオタバコガ -③
花き	

※ 上記の表に記載された病害虫は、下記の①～③へ該当します。

注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病害虫

②「1 主な病害虫の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病害虫の中で特に懸念される病害虫

③「1 主な病害虫の発生予報」以外で、調査の結果、県全域的に発生が多く、問題になると判断した病害虫

1 主な病害虫の発生予報

(1) 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	平年並	天候予報(5月22日発表1か月予報)によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている(±)。	補植用置苗は本病の伝染源となるため、補植を終えたら速やかに処分する。 窒素肥料の多用をさける。
	イネドロオイムシ	全 域	平年並	平年並	天候予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている(±)。	発生が目立つ場合は、薬剤による防除を行う(要防除水準：3～4齢幼虫が1株当たり10頭以上寄生)。 移植が遅い場合は被害が大きくなりやすいので注意する。
	イネミズゾウムシ	全 域	平年並	平年並	育苗箱施用薬剤の普及により、被害は抑えられている(±)。	成虫の寄生が100株当たり40頭以上確認される場合や、水田内のほぼ全葉に食害がみられる場合は水面施用剤を散布する。
	イナゴ類	全 域	—	やや少	発生は場割合、すくい取り数は近年減少傾向にある(—)。	例年発生が多いほ場では、6月中旬～7月上旬にふ化幼虫を対象として薬剤散布を行う。



病害虫防除所
HPは
←こちらから



病害虫に関する
防除対策の
ページは
←こちらから

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
麦 類	赤かび病	全 域	－	やや多	感染好適条件の出現日は 平年よりやや多かった（＋）。 天候予報（5月22日発表 1か月予報）によると、向こ う1か月の降水量は平年並 と予想されている（±）。	適期に収穫し、収穫後は速 やかに乾燥調製に入る。 発病した場合は刈り分け を行い、被害粒の混入を防 ぐ。

注）予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

（２）果樹

○現在の果樹の生育は、平年より2～6日早まっています（ぶどうは平年並）。

○1か月予報（5月22日付け仙台管区気象台発表）によると、向こう1か月の平均気温は高い確率50%であり、今後、虫害の発生時期が早まることが想定されます。発生予測を参考とし、適期防除を徹底しましょう。

○ナシ黒星病の発病果・発病葉やリンゴ褐斑病の発病葉の発生が確認されています。

○ほ場内の病害虫の発生状況や今後の気象情報に留意し、生育に応じた計画的な防除を実施しましょう。また、耕種的防除を徹底し、発生密度の低減を図りましょう。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑 点 落 葉 病	全 域	－	平年並	5月下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	
	褐斑病	県北 県中・ 県南 会津	－ やや早 －	平年並 やや多 平年並	県北・会津地方では5月下旬の新梢葉・果そう葉での発生は平年同様に確認されなかった（±）。 県中・県南地方では、新梢葉・果そう葉での発生ほ場割合は平年よりやや高く（＋）、発生時期もやや早かった。	本病の子のう胞子は6月下旬頃までは飛散する。また、本年は果そう葉や新梢葉での発生が早く、発病葉からの分生子の飛散も早まるため、薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	腐らん病	全 域	－	平年並	5月下旬の発生ほ場割合は平年並であった（±）。	枝腐らんは見つけしだい健全部5cm以上含めて切り取る。 胴腐らんは見つけしだい周囲の健全部まで5cm広く削り取り、殺菌塗布剤を塗布する。
	キンモン ホソガ	全 域	－	平年並	5月下旬の新梢葉被害は平年同様に確認されなかった（±）。	
	アブラム シ類	全 域	－	やや少	5月下旬の新梢寄生の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった（－）。	

モ モ	灰星病	中通り	—	平年並	5月上旬の花腐れの発生ほ場割合は平年並であった(±)。	本病による枝枯れは見つけしだいせん除し、園外に持ち出すなど適切に処分する。
	せん孔細菌病	中通り	—	やや少	5月上旬の春型枝病斑の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(—)。	発病部位のせん除を徹底する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。 本病の発生が多い場合は、仕上げ摘果後、直ちに袋かけを実施する。 今後の気象経過によっては、発生が急増する可能性もあるので油断することなく対策を実施する。
	モモハモグリガ(第1世代成虫)	中通り	—	やや多	5月上旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は平年(5月下旬比較)よりやや高かった(+)。	適期防除を確実にを行い、密度低下を図る(令和7年5月21日付け令和7年度病害虫防除情報(モモハモグリガ)参照)。なお、本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。
ナ シ	黒星病	県北 県中・ 県南 浜通り	— — —	平年並 平年並 やや多	中通り地方の5月下旬の果そう基部病斑の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(—)が、果実での発生(果面での発生が多い)が確認されたほ場が複数あった(+)。 浜通り地方の5月下旬の果そう基部病斑の発生ほ場割合は平年並であった(±)が、果実での発生(果面での発生が多い)が確認されたほ場が複数あった(+)。	果そう基部病斑や発病葉・果実は、徹底して除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 「幸水」では果実の感受性が高まる時期(満開後50～90日)を迎えるため、防除を徹底する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。

ナシ	アブラムシ類	全 域	－	やや少	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった（－）。	
果樹共通	カメムシ類	全 域	－	やや多	フェロモントラップ調査における4月5半旬～5月4半旬の果樹カメムシ類の越冬世代の誘殺数は、8地点中5地点で、平年と比較して2～19倍と多い状況であった（＋）。	越冬世代成虫による加害は幼果期から始まるため、特に山沿いの園地ではよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤防除を実施する（令和7年5月23日付け令和7年度病害虫防除情報（果樹カメムシ類）参照）。

注）予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

（３）野菜花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、防除を徹底する。 多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	コナジラミ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 前作でタバココナジラミが確認されたほ場では、開口部に防虫ネットを展張する。
	ハモグリバエ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	－	やや少	発生ほ場割合はやや低かった（－）。一部ほ場で発病度の高いほ場が確認されている。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。

キク（露地栽培）	アブラムシ類	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（＋）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった（±）が、天候予報（仙台管区気象台 5 月 22 日発表）によると、向こう 1 か月の気温が高くなると予想されている（＋）。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった（±）が、天候予報によると、向こう 1 か月の気温が高くなると予想されている（＋）。	ほ場をよく観察し、葉裏まで薬剤がかかるように防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	－	平年並	育苗床からの持ち込みと思われる被害痕が見られ、発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	上位葉での発生に注意し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ	葉枯病	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（＋）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった（±）が、一部で寄生度の高いほ場が確認されており、天候予報によると、向こう 1 か月の気温が高くなると予想されている（＋）。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は速やかに防除を実施する。

注）予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

2 発生が懸念される病害虫

水稲	■ ナガエツルノゲイトウ いわき市の一部で発生を確認しています。蔓延防止に努め、詳細は特殊報（令和6年8月8日福島県病害虫防除所）を参照ください。
リンゴ ・モモ・ ナシ等	■ ナシヒメシンクイ モモの巡回調査において、ナシヒメシンクイの芯折れ症状が確認されています。ナシヒメシンクイ第1世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、6月3半旬頃と予測され、第2世代の防除適期は6月5半旬頃と推定されています（農業総合センター果樹研究所、5月15日現在）。 本種の第1世代幼虫は、主にモモ等の核果類の新梢に寄生（芯折れ症状）し、第2世代以降はナシなどの果実に移行します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底してください。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守してください。
リンゴ	■ ナシマルカイガラムシ 近年、ナシマルカイガラムシによる果実被害が問題となっています。ナシマルカイガラムシ第1世代のふ化開始は、気温が2℃高く推移した場合、5月6半旬頃と予測され、ふ化盛期は6月2半旬頃と推定されています（農業総合センター果樹研究所、5月15日現在）。今後の発生予測情報を参考にし、適期防除を徹底しましょう。
ブドウ	■ 晩腐病 幼果期の防除終了後速やかにカサ掛けを行ってください。カサは雨もりを防ぐように丁寧に行いましょう。また袋かけ前の防除終了後は、速やかに袋掛けを行いましょう。
夏 秋 トマト(被 覆栽培)	■ トマトキバガ 令和7年3月から、トマト及びミニトマトの周年栽培ハウス内でトマトキバガ幼虫による葉や果実の食害が発生しています。また、5月から夏秋栽培の育苗中の苗についても幼虫の寄生及び葉の被害が確認されています。 今後、幼虫が寄生した苗を本ぼへ持ち込まないように、定植苗の食害痕の確認を行う等、注意が必要です。また、被害残渣はビニール袋等に入れて蒸し込みし、完全に死滅させてください。 ■ トマト黄化葉巻病（TYLCV） 4月上旬定植の夏秋トマトほ場において、トマト黄化葉巻病の発生が確認されています。タバココナジラミの侵入を防止するため、ハウスの開口部に防虫ネット（0.4mm目合い）を設置しましょう。 発生が確認されたら、薬剤によるコナジラミ類の防除を徹底してください。 病害虫防除所ホームページでも情報を掲載しているため、下記のURLも参考にしてください。 【注意喚起～トマト黄化葉巻病（TYLCV）のまん延防止対策～】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/544337.pdf 【トマト黄化葉巻病（TYLCV）対策 チラシ】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/648953.pdf 【トマト黄化葉巻病（TYLCV）対策 パンフレット】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/648954.pdf
野 菜 花 き 共 通	■ オオタバコガ 県北地方に設置しているフェロモントラップにおいて、5月4半旬の頭数が18頭誘殺されています（平年6.9頭、平年比2.6倍）。今後の被害に注意してください。